



新たな世代の農業とその多様な広がり

北海道地域農業研究所

事務局長

谷口 勝

時代の画期

いよいよ二十一世紀に入った。多少の不安はあるものの、どんな世の中になるのか楽しみだ。情報誌等で仄聞すると、二十世紀は戦争の世紀とも言われ、イデオロギーや民族が争った時代が長くあった。また、二十世紀は発明の世紀とも言われ、最後にIT革命も加わり、世の中豊かで随分便利になった。この時代の技術革新や世相変化が目まぐるしかったことから、モノ不足の時代に育った世代とモノが溢れ豊かな時代に育った世代では、仕事に対する思い入れや生活観に大きな違いがあるようだ。我が国の経済は一九六〇年代の高度経済成長を背景に大衆消費社会へ入り込んでいく。

これをつけて農業も一九六〇年代を画期として、他産業勤労

者並みの所得をめざし農業基本法をベースとした様々な構造・価格所得政策がうたれ現在の姿になっていく。

このことから、一九六〇年（昭和三十五年）前後を境に生まれた世代によってその違いがあるようだ。一九六〇年（昭和三十五年）前後を境に生まれた世代は、男女雇用機会均等法や労基法の労働時間の短縮をうけて農村女性の農業経営のパートナーとしての位置付けやゆとりのある農業従事の始まりとなる。

世代の特徴

サントリー不図流行研究所編「時代の気分・世代の気分」一九九七年日本放送出版協会によれば、世代をコーホートとしてとらえ、生活意識と行動の特徴を次ぎのように表現している。

一〇年代生まれ「勤勉実直世代」、昭和二〇年代生まれ「走りつづける頑張り世代」、昭和三〇年代生まれ「ワンランクアップ消費世代」、昭和四〇年代前半生まれ「堅実・安定志向世代」、昭和四〇年代後半生まれ「体感なきデジタル世代」と呼んだ。昭和三〇年代生まれ「ワンランクアップ消費世代」から価値観の多様化やライフスタイルの変化が目立つ。

戦後農業を支えていた昭和一ケタ生まれが引退しはじめ、農家の急激な減少で農業・農村の活力の衰えが先行き憂慮されている。しかし、農業の現場ではまだ五〇才代、六〇才代、七〇才代の頑張り世代が主流派であるが、次代を担う四〇才代（昭和三〇年代生まれ）も一定のウエイトを確保している。（基幹的農業従事者）

農業・農村の多面性

昭和三〇年代生まれの世代が農業に参画する昭和五〇年代は、多様な価値観を持つ人々がしだいに消費や生活観をリードすることで、モノの豊かさ重視から心の豊かさ重視に大勢がうつり、健康とかゆとり、安全・安心へと関心が高まっていった。

この時期北海道農業は米生産調整の定着、主要農畜産物の価格支持の停滞、酪農負債からはじまる固定化負債対策、後継者不足と高齢化の進行、そして昭和五〇年代後半からの農地価格の低下へとつづき、農業構造・農家経済とも厳しい局面に立た

された時期であった。しかし、このような状況のなかで昭和六〇年代以降に結実する新規作目の導入、花卉栽培の増加、有機農業や地域農産加工の取り組み、農村アメニティの形成などの多彩な動きが育ってきていた。そうした流れが確実に現在に引き継がれている。

農業の多様な広がり

現在、個性ある農業経営が目につく。積極的に規模拡大投資をして高収益を目指す経営、低投入を徹底して等身大の農業を楽しんでいる人々、情報ネットワークを駆使し仲間づくり、地場・無農薬・手作りを生かした都市のこだわり派との交流、レストラン・体験・祭り・民俗伝承など農村のエンターテイメントの発揮。自分の生き方を大事にする豊かな時代に育った世代が頑張り世代にも刺激しつつ、安定した所得、家族と過ごすゆとりたりの時間、先輩に学び、地域や都市の人と交わりながら、職業としての楽しさと充実感を少しづつ自分のものになっている。

これからの担い手は与えられた目標を進むのではなく、自分の目標を達成するため農業経営の姿、経営資源の配分、それへのアプローチ、家族との生活スタイルなど豊富な選択肢の中から選び取る時代になってきている。新世紀はそうした時代の旗手たちが農業の構造的変化に対峙し、農業の多様性を縦横に活かした、広がりのある世界へと作り上げていくと確信する。